

経営者の皆様に、次への視野(スコープ)を。
毎月、かんぽ生命がお届けします。

かんぽスコープ

Vol.86

経営
時流

長期インターンに託す。 企業戦略に、採用活動をリンクさせよう。

ここ数年、新卒の獲得競争が激化する中、就活生へのアピールにインターンシップ※を活用する企業が増えています。ただし、その効果がみられるのは大企業。中小企業は社会勉強の場にとどまっているのが現実です。そこで発想の転換。採用の成果を期待するのではなく、会社の活性化や成長戦略の一助としてインターン生を受け入れる企業が現れています。そして中には、実際の採用に結びついたケースも。今回は、こうした新しいインターンシップの好例として、横浜市の株式会社安藤建設、安藤竜一社長に取材しました。

インターン体験で、 会社の実像を知って入社。

昨年(2016年)の4月、安藤建設に瀧田夕姫さんが新卒入社した。瀧田さんは湘北短期大学の生活プロデュース学科でインテリアデザインを学び、1年次の2月に3週間、安藤建設でインターンシップを体験。学業の延長で模型やイメージボード作りを手伝い、工事現場に顔を出し、作業の定例会にも参加した。

「3月から就活を始めて、初めは応募する気はなかったのですが、会社

訪問を繰り返しているうちに、だんだん気になってきて…」

瀧田さんは「インターンで会社の良いところも悪いところも見られたのが良かった」と振り返り、安藤氏は「建築業は荒っぽいからね」と笑う。現場では、普通の会話が怒鳴り合いに聞こえることもあるという。

「ただ、瀧田は特別。来てくれて嬉しかったですが、基本的には、インターンと採用は切り離しています」と安藤氏は語る。



代表取締役
安藤竜一



営業部
瀧田夕姫

安藤建設は、戦時中、安藤氏の祖父が大工仲間を組織して工事を請け負っていたのが始まり。1960年

地域とともに発展する 戦略への手助けを期待。

「でも、しよせん点な

に法人化し、大規模なビルから木造住宅まで、神奈川県内の建築施工を幅広く手がけている。安藤氏が3代目社長に就任したのは2010年。そのとき打ち出した方針が「地域とともに発展する建築業」だ。

「建築って、囲いの中で作業をするから、何をしているか見えないじゃないですか。しかも最近ではデータ改ざんとか、ダーティーなイメージをもたれやすい。地域に根ざして仕事をやるからには、地域から頼られ必要とされる、信頼され愛される会社になりたいと思っただけです」

その思いを安藤氏は社長になる前から温めていた。祖父以前にさかのぼれば、江戸時代から何代も続く大工の家系。建築業の社会的な価値を問う気持ちがあったのかもしれない。安藤氏は、商店会や学校運営協議会などの

活動を通じ、お世話役として地域にとけ込むように努めてきた。

「でも、しよせん点な

2015年の地元の夏祭りにて、インターン生が出店。



2016年3月に竣工した東寺尾どころこ保育園。第60回神奈川建築コンクール一般建築物部門で優秀賞を受賞。安藤建設は大規模木造建築にも強く、社会貢献の観点から保育園や老人福祉施設など公共的な施設の受注に力を入れている。

株式会社安藤建設 〒235-0036
神奈川県横浜市磯子区中原2-1-15
☎045-772-2121
<http://www.ando-const.co.jp>

「ウメニー」。同社は杉田小学校で体験授業の枠をもっていて、その中で子どもたちが、地元杉田梅をモチー

んですよね。それを線に変えて伝え、安藤建設の存在を地域から見えるようにしてくれたのがインターン生です」

インターン生に、何か具体的な仕事や課題を与えるわけではない。安藤氏もつ「種」を投げ込むだけだ。「種」は、地域活動だったり、人脈だったり、行政の施策だったり…。それをどう育てるか各自に任されている。たとえば最近与えた「種」は、横浜市の耐震・エコ改修の助成金情報。分かりにくい制度をインターン生が簡潔な文書にまとめ、同社で家を建てた既顧客に配った。

地域で有名なのが、同社がある磯子区杉田地区のご当地キャラクター「ウメニー」。同社は杉田小学校で体験授業の枠をもっていて、その中で子どもたちが、地元杉田梅をモチー

※学生や生徒が在学中に実際の企業に赴き就業体験ができる制度。

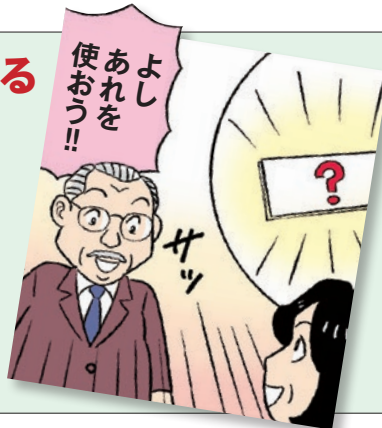
フに地域を盛り上げたいと発案したものだ。同社はデザイナーに依頼してキャラクターを完成させ、著作権に関係なく誰でも自由に利用できるようにした。今では小学校の行事や商店街の振興、商品化などで活用され、その活動の支援を歴代のインターン生が脈々と受け継いでいる。「インターン生は、私が越えられない境界を軽々と越えてくれます。一方、インターン生には破れない壁があつて、そこは私が崩す。いいコンピニーションになっていきますよ」

学生と会社がともに成長できる機会にする。

安藤建設では、3年間で約30人のインターン生を受け入れてきた。一般的なインターンシップは1週間など短期が主流だが、それでは「お客さん」で終わってしまうので、3週間または6カ月の長期としている。3週間の場合は毎日で、瀧田さんのように現業も体験。6カ月の場合は授業の合間で参加し、主に地域活動に従事。インターン期間中は、月に5万円の学業支援金を支給する。「長期でインターン生を受け入れると、人手不足の埋め合わせと考えると、手前がちです。それではアルバイトと変わりません。学生にとっては勉強にならないし、会社にとっては意味がない。どうせなら、学生も会社も、ともに成長できるようなインターンシップにしたいですね」

採用活動に、思い切って使える 余裕資金を備えていますか。

採用とは、会社の将来を託す人材の獲得。優秀な人材を獲得しようと、採用市場では、各社がしのぎを削っています。採用活動を積極的に、かつ用意周到に行うための資金準備について考えましょう。



ぜひご覧ください

マンガで楽しく、
分かりやすく
ご案内しています。

かんぽビジネスライブラリ
「採用資金に活用」の巻



資料をご要望の皆さまへ

ご覧の資料をお届けします。
ご要望の方は、お手数ですが、かんぽ生命保険の
最寄りの支店までご連絡ください。



文=阿部博幸

医療法人社団博心厚生会アベ・腫瘍内科・クリニック理事長。臨床内科専門医、労働衛生コンサルタント。著書に『がんで死なない治療の選択』ほか多数。

がん治療最前線

理想的な「ハイブリッド免疫療法」

自然免疫のNK細胞と獲得免疫のキラーT細胞

ハイブリッドという言葉は、ガソリンエンジンと電気モーターという2つの異なる動力で効率的に走るハイブリッド・カーが登場してからなじみの深い言葉になりました。私たちの体を病気から守る免疫も同様に異なる2つの働きを有しています。それは、侵入した異物をすぐさま排除する生来備わった自然免疫と、ワクチンなどにより異物を記憶して攻撃を仕掛ける獲得免疫です。

免疫を利用したがん治療においても、この2つの免疫系を同時に活性化させて、ハイブリッドで治療を行うことが理想的だと考えられています。

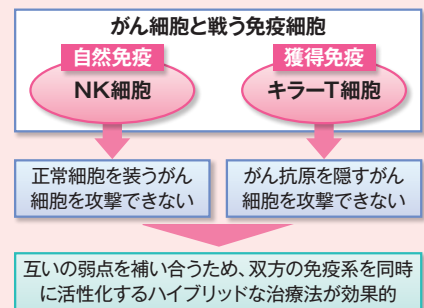
自然免疫の働きを利用した免疫療法の代表がNK細胞療法です。がん細胞をはじめとした異物を攻撃するNK細胞を体外で

大量に培養し、活性化させて体に戻す治療法です。年齢とともに減少しがちなNK細胞の数を増やし、自然免疫の働きを高めることを目的としています。

しかし、中には細胞表面の分子を巧みに使って正常細胞を装い、NK細胞の標的とならないように逃れるがん細胞があります。そこで出番となるのが、前回お話したキラーT細胞を活性化させる樹状細胞ワクチンによる治療です。獲得免疫系であるキラーT細胞は、NK細胞とは別の目印(がん抗原)でがん細胞を見分けるため、NK細胞が取り逃したがん細胞を攻撃することができるのです。

2つの免疫系が互いを補い合う

そうすると、キラーT細胞さえ活性化すればよいのではと思えてしまいますが、厄介なことにがん抗原を隠してしまうがん細胞も存在します。そこで頼りになるのが、がん抗原を目印としないNK細胞なのです。がん細胞は免疫の監視をかくぐり、姿を変容させながら生き延びようと必死です。これに対抗するには、互いに補い合う2つの免疫系を同時に活性化する「ハイブリッド免疫療法」が効果的といえるでしょう。



(注) 記事中に記載の法令や制度等は取材当時のもので、将来変更されることがあります。詳細につきましては、各専門家にご相談いただきますようお願いいたします。